

ポール・ブリューナ(1840-1908)はシルクが主要産業であったフランスのブル＝ド＝ページュで育った。1866 年、ブリューナは横浜支店に彼を送ったフランスのシルク商社でシルク品質検査官として働いた。

産業革命の 1600 年代、ヨーロッパで蒸気機関が発明されたが、その技術は日本が外国貿易へ開港する 1800 年代まで日本に持ち込まれることはなかった。日本政府は富岡製糸場のプロジェクトに蒸気力を利用することに熱心で、彼らは蒸気で動く工場をどのように操業するかを彼らに示すために西洋人を必要とした。ポール・ブリューナは理想的な人選だった。ブリューナはすでに数年間日本に住んでおり、それよりも長くシルク産業に勤めていた。1870 年、日本政府は理想的な工場の場所を見つけるようブリューナに委託した。そして 3 つの大きな利点のある富岡が選ばれた。まず、田島弥平氏(1822-1898)の養蚕農場をはじめとする大規模で成功した蚕種・繭産業があり、第二に炭鉱のエネルギー需要を満たすことができる 2 つの石炭鉱山町、高崎と芳井が近くにあった。第三に、これがおそらくもっとも重要な点だが、彼らの計画は地域社会に受け入れられた。工場の建設は 1872 年に完成した。そしてブリューナは家族を敷地内で彼のために建てられた家に移した。当初、2 人のフランス人エンジニアと 4 人のフランス人製糸の女性が日本人スタッフに設備の使い方を指導していた。ワインセラーを含む、ブルナットの製糸所の家は今日でも残っている。